



アホウドリ通信

No.1

2024年2月29日



発行：
(公財)山階鳥類研究所

このたびはアホウドリ寄附サポーターにご参加いただき、まことにありがとうございます。「アホウドリ通信」では、サポーターの皆さまに、アホウドリ保全活動の現場の様子やこれまでの研究成果など、さまざまな情報を年4回にわたりお届けいたします。今回は記念すべき第1号！ これまでの鳥島におけるアホウドリ保護の歴史と、2023年11月に行われた鳥島第85次調査隊からの報告をお届けします。

鳥島でのアホウドリ保護と山階鳥類研究所

かつては数百万羽がいたアホウドリ。羽毛布団の材料として乱獲され、1949年には「絶滅した可能性が高い」と報告されました。山階鳥類研究所では、それより前の1930～1939年に鳥島に研究者を向かわせてアホウドリの生息数調査を行っています(図1)。また1951年に鳥島で約10羽が再発見された後、1962年から1973年にかけて6度、研究者を派遣して、ヒナに個体識別用の足環を装着するなどの調査を実施しました。1976年からは、長谷川博さん(現・東邦大学名誉教授)による調査・保全活動が始まりました。

その後、山階鳥類研究所では鳥島のアホウドリの繁殖成功率を改善させるため、従来の繁殖地である燕崎に加え、島の反対側に位置する初寝崎に、実物大のデコイ(模型)と音声でアホウドリを誘引し、新たな繁殖地(コロニー)を形成するプロジェクト「デコイ作戦」をスタートさせました(図2、図3)。これは、燕崎は急峻な崖の下に位置しており、ヒナや親鳥が流れてきた土砂に埋まるなどの事故が多く、繁殖成功率が安定せず、ゆるやかな地形の場所に新たなコロニーを作る必要があったためです。1991年に予備実験を行うため、第1次調査隊が組まれました。1992年から本格的に開始されたデコイ作戦は、2006年に第56次調査隊により初寝崎で14羽のヒナの巣立ちが確認されたことから、「初寝崎に安定したコロニーが形成された」と結論づけ、終了しました。現在、初寝崎は500羽以上のヒナが巣立つコロニーに成長しています。デコイ作戦終了後も毎年途切れることなく調査隊が組織され、直近では2023年11月に第85次調査隊が鳥島に行きました。



図1 1930年に山階芳麿が撮影した鳥島の様子



図2 初寝崎に設置されたアホウドリのデコイと音声装置



図3 鳥島にある3つの繁殖コロニー

■ 鳥島第85次調査隊～アホウドリの卵の数を数えろ！～

2023年11月に、第85次調査隊が鳥島で調査を行いました。今回の目的は、各コロニーの様子と繁殖状況を確認し、生息数の将来予測のために必要となる基礎データ「アホウドリのつがい数」を調べることです。アホウドリの生息数を予測するためには、正確な繁殖成功率（何組のつがいから何個の卵が生まれ、何羽が無事に巣立ったか）を把握しておくことが必須です。アホウドリは1回の繁殖で1つの卵を産むため、つがい数＝卵の数としています。

今回の日程は以下のとおりでした。

2023年 11月 7日	八丈島集合、準備
9日 13:30頃	八丈島出港
10日 9:00頃	鳥島上陸
11～28日	調査
29日 16:00	鳥島離島
30日 14:30	八丈島到着
12月 2日	解散

鳥島での調査期間は18日間。この間に、鳥島の3つのコロニー（初寝崎、燕崎、子持山。1ページの図3参照）をくまなく調べ、アホウドリの繁殖状況、卵の数を調べました。その結果、初寝崎では730卵、燕崎600卵、子持山244卵の合計1,574卵が確認できました。2022年は計1,487卵でしたので、順調にアホウドリの産卵数が増加していることがわかりました！



写真1 鳥島に向け八丈島を出発する調査隊メンバー（11月9日）



写真2 鳥島滞在中の生活・調査物資。これから調査拠点に向け標高差約100mを荷揚げ（11月10日）



写真3 初寝崎コロニーでの調査の様子（11月12日）



写真4 初寝崎コロニー拡大写真。ほとんどのアホウドリが抱卵中のため、座った状態（11月12日）

隊長からのひとこと



今回は海が良く、奇跡的に予定どおり八丈島を出港し、鳥島に上陸できました。鳥島での調査時間を十分に確保できたため、卵数カウント以外にも行動観察からいくつかの巣では産卵日を特定できたり、雌雄の産卵交代の様子（アホウドリは雌雄が交代で抱卵する）を確認できたりと、アホウドリの繁殖生態の一端を垣間見ることができました。ほかにも、親鳥が水浴びなどで一瞬巣を空けたタイミングで若い個体が巣に近づいて卵を抱いてみたりするといった、興味深い行動もたびたび観察されました。

しかし、帰るときは天候が一転し、海が悪い日が続く中、一瞬のタイミングをみての離島となりました。天気図を見ながら船頭と離島日を決めましたが、予想よりも早く天気が崩れるとのことで急遽前倒しのスケジュールとなり、大忙しでした。帰りは大荒れでしたが、皆無事に帰ってこられて、船頭に感謝でした。



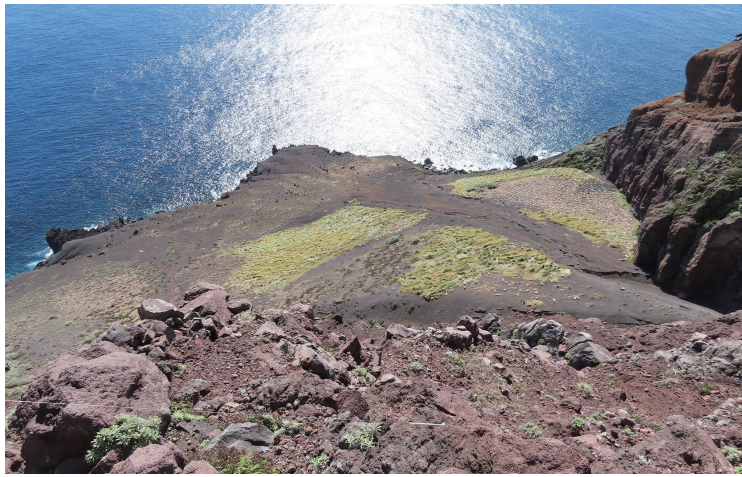


写真5 燕崎コロニーの全景(11月15日)



写真6 燕崎コロニーで抱卵するアホウドリ(11月21日)

■ 賀島も調査継続中！

繁殖地復活を目指す小笠原諸島賀島では、今年度も繁殖シーズン中に3回の調査を実施しています。詳細は次号！



■ サポーター参加の御礼

アホウドリの保全活動は、現在、主に環境省と東京都の予算によって、鳥島と小笠原諸島の賀島で行われています。その結果、アホウドリの個体数は回復傾向にあります。このような一定の成果が得られたことで予算は縮小傾向にあり、とくに毎年の現地調査の実施が難しくなっています。アホウドリが絶滅危惧種から脱却するためには、最低でも今後10年は活動を継続する必要があります。アホウドリの明るい未来を目指して、アホウドリ寄附サポーターの募集を2023年11月に開始して以降、2024年1月末時点で290名の方々にご参加いただいております。この場を借りて御礼申し上げます。アホウドリ寄附サポーターは、サントリー世界愛鳥基金の支援を受けて開始されました。

サポーター一覧（敬称略、50音順）

※広報物への掲載を承諾いただいた方のお名前を載せています。

青柳武、浅野正弘、芦田裕子、新川その子、飯田敏子、飯塚直樹、池田薫、池田昌美、石居正浩、石井亮、石川静香、石川雅子、石塚勉、石野晃平、石原義明、磯部純子、伊藤明子、伊藤多加代、伊藤英代、井上邦久、井上仁、今田吉孝、岩崎金蔵、岩崎靖夫、岩田一宏、江藤典子、及川毅、大溪恭子、大畑良平、大橋正明、岡田英子、岡本典子、小川真理、奥野卓司、尾崎清明、織田和恵、小幡好昌、柏木利秀、片岡晶子、片寄愛、桂梨花、加藤美知子、加藤弥生、金竹恵子、上沖正欣、河内真樹、川崎美重子、北村友衛、木下裕子、木下道臣、絹村光代、金炯蘭、工藤隆、倉橋義弘、黒崎隼平、黒澤里美、桑名英一、神津千恵美、国分世拓、小林誠二、小林泰之、五味忠則、小柳正一、今野博、今野美和、今野基、齊藤純子、佐伯彰光、酒井詩織、櫻井太郎、佐々木彩佳、佐田隆、佐藤彩華、佐藤正満、佐藤由美子、佐藤遼太郎、重原美智子、芝昌繁、島田和人、嶋村早樹、清水伸彦、下間明子、下野彰夫、白石健一、城石一徹、鈴木愛、鈴木康子、関口祐、仙波美恵子、大聖寺バードウォッチングクラブ、高草木晶子、高崎隆志、高橋俊夫、高畑邦則、竹内章夫、竹田山原楽、多田祐子、田中晴美、田中浩史、田中里栄子、田邊章、谷口広吉、田村数弘、丹野忠弘、千野真梨英、千葉すみれ、千葉桜えりか、塚原眞司、塚元夢野、辻幸治、土屋一郎、角田正美、坪井利文、露木潤子、寺島正彦、等々力泉、友成久世、鳥居佳子、鳥飼久裕、長岡秀成、長岡律子、中込知香子、長嶋葉子、中塚将義、中野美由紀、仲真晶子、中村淳、中村哲雄、中村真佐美、中山一朗、新堀正則、西教生、西出康紀、西村晋一、野口由紀子、野倉皇男、橋本了次、畠山照子、服部裕子、日笠大有、菱沼博志、平川早苗、平山順、深澤建哉、福田篤徳、福田吉弘、藤井早紀、藤森賢也、船津登、北條政利、星ゆきこ、堀内豊太郎、堀信太郎、前山亮、牧野多美子、増井暁夫、舩方涼子、増永亨介、松井正之、松島健、松村雅行、三谷信代、三井陽子、光成高志、峯尾雄太、宮崎忠芳、宮野良子、村上真由美、本橋明夫、本村彩織、百瀬淳子、森碧、森亮太、森脇史郎、八重樫操、矢ヶ崎和明、柳由紀子、山口貴之、山口満雄、山崎喜与実、山崎泰正、山田隆章、山田奈美香、山西久美子、山根みどり、湯瀬智世、油田信一、油田春人、横田昌三、吉田香織、吉田直矢、米山富和、米山実里、渡邊祥子、渡邊直美、渡部良樹